

第7群

1~27 ターミナルにおける患児の行動パターン

—死に直面した患児の心理理解に役立つ手立てを探る—

信州大学医学部附属病院 ○竹内幸江・堀 美代子

1. はじめに

ターミナルケアにおいては、看護に期待されるところが大きいと言われている。しかし、ターミナルステージにある患児の気持ちをくみ入れて、適切に対処したいと思いつつ、その心理を理解する手立てがつかめないのが現状である。

その中で、患児の話す内容、動作に注意を向けているうちに、死期の近くなった患児の行動には何らかのパターンがあるのではないかと思うようになった。キューパー・ロスも「死ぬには若すぎる患者はシンボル言語を使う」と述べているように、それらを理解することにより、今後のケアの指標になるのではないだろうか。

2. 研究目的

(1) ターミナルステージにおける患児の行動を明らかにする。

(2) その内容を分析し検討することによって、患児の心理理解に役立つ行動パターンには、どんなものがあるか明らかにする。

(3) (1)(2)より患児の心理状態を知る手がかりとして、これらのパターンを考察する。

3. 研究方法

(1) 対象

当院小児科にて、昭和61年以降死の転帰をとった患児15名(除:乳児・意識障害患児)

(2) 方法

1) 付き添っていた家族と面談し、患児の行動についてのききとり調査をし、心理理解と関連する行動を抽出する。

※面談方法は、研究者1名が訪問し、1例または2~3例の家族と面談を行う。

2) 看護記録より、患児の心理理解と関連する行動を抽出する。

3) 1) 2) のデータから、関連すると考える意味のまとまり・類似性を基に分類する。

4. 結果および考察

今回、面談によるデータ数は10例、看護記録によるもの5例であった(表1)。これらに関連すると考えられる意味のまとまり・類似性を基に分類すると、以下のようになる。

(1) 「棺、波が来て橋を壊す、守護神が来た、蛇」等、死に対する患児のイメージを表現していると思われる言葉がみられる。それらを表現する時期は、小康状態を経て、諸々の要因で増悪した時期に多い。

(2) どの患児にも病名・予後については告知していないが、自分が死ぬことを知っていると思われる行動がみられる。特に、13歳以上の患児にははっきりと表れている。

1) 学校生活や物事に区切りをつけるようになる。

2) 退院する友人や面会に来た友人に無理をおして会う、祖母や母親を抱きしめる等、別れを告げるような行動がみられる。

3) 「ありがとう」と感謝する言葉、あるいは謝罪する言葉がみられる。

(3) 死を予感した患児は家族に対して自分のものをあげる、夫婦関係を気遣う等遺言めいた言葉を残している。

(4) すでに起き上がれる状態ではないのに、散歩へ行く、お楽しみ会に参加する、外泊したいと言う等、普通の生活を送ろうとする意欲がみられる。

(5) 5歳以下の患児では、食べられないのに好きな物を所望したりする言葉がみられる。

(6) 「あっちへ行くの」「もうだめだ」と、自分が死ぬ時をはっきりと告げる言葉がみられる。

以上のことから、ほとんどの患児は自分が死ぬことを知っていると考えられる。そして、何らかの行動でそれを表していることがわかる。

さらにこれらのデータから、患児が死ぬことをどのように意識しているかに焦点を当て、分析すると、次のような行動パターンがあると考えられる。

(1) 死を否認する。

表1 患児の行動 (A~Jは面談, K~Oは看護記録より)

| | |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A : 19歳 女 | 再発で入院連絡があった時「もうだめだ」と言う。 入院を学園祭が終わるまで引き延ばし、学校生活に区切りをつけておくような行動があった。 (死亡5日前) 母親を力一杯抱きしめた。 (死亡3日前) 面会に来た父と妹に「ありがとう」と感謝し、自分の貯金を妹にあげると言った。 |
| B : 16歳 男 | 亡くなる寸前まで自力で排便しようとする等、精一杯頑張った。 (死亡3か月前) 「守護神が来た夢を見た」と話した。 |
| C : 16歳 男 | (死亡8日前) 突然「棺ある?」と言った。 (死亡4日前~当日) 「今の目標は外泊だ。できるよね」と何度も聞く。「帰りたい」と言い続ける。 |
| D : 13歳 女 | 素直になり、物事に区切りをつけておくようなことが多くなった。 両親の夫婦関係が冷え込んでいることを気にしてくれていた。 (死亡4日前) 友人の退院時「最後になるかもしれないから」と言い車椅子にて見送りに行った。 (死亡3日前) 弟に「姉ちゃんの方まで勉強するように」と言った。 (死亡前夜) 「波が来て壊れちゃう、波が橋を壊しちゃう」と言った。 |
| E : 8歳 男 | (死亡2日前) お楽しみ会にストレッチャーで参加した。 (死亡前日) 仲良しの「Kちゃんがそこにいる」と布団の上を指さして言った。 ※Kちゃんは10日後に死亡する。 (死亡前夜) 「みんなにバイバイするの」と言い、どこへ行くのかと聞くと、「むこう」と答えた。それが最後の言葉であった。 |
| F : 6歳 男 | 死亡する少し前から素直になった。 (死亡3日前) お楽しみ会にストレッチャーで参加した。 (死亡2日前) 友人と面会するために、無理をおしてホールまで出かけた。が、その子と話はしなかった。 |
| G : 5歳 男 | (死亡前日) はっきり物が言えない状態の中で「遊ぼうよ」「サンドイッチ (好物)」「蛇」と妙なことを言った。 |
| H : 5歳 男 | (死亡の朝) 病院に行く時、いつもは母親に抱かれて車に乗るのに、その時は祖母に抱いてもらおうと泣いて言い張った。 |
| I : 3歳 男 | (死亡前夜) 苦しい中でシチューを所望する。しかし、ほんの2, 3口食べたただけであった。 |
| J : 2歳 男 | (死亡前夜) 「お母ちゃん、もうだめだ」と言った。 |
| K : 15歳 男 | (死亡10日前) Nsの後ろを黒い人影がサーと通り過ぎたと言う。 |
| L : 14歳 男 | (死亡3日前) 面会に来た伯母たちが帰ろうとすると「もう少し、あと10分いてくれ」と引き止める。 (死亡前日) I V H挿入中「死ぬためにやった、あと3日で死ぬ」 (死亡前夜) 「警察を呼んでくれ、悪いことをしてきたから…」と。 |
| M : 11歳 女 | 車椅子、ストレッチャーでよく散歩に出かける (死亡4日前まで)。 (死亡当日) 「治る?」と言ってばかりいる。 |
| N : 7歳 男 | 車椅子、ストレッチャーでよく散歩に出かける (死亡13日前まで)。 (死亡15日前) 「家へ帰りたい、家に帰れば治る」と言う。 (死亡14日前) 腹痛強くなるが、我慢してストレッチャーでお楽しみ会に参加する。 (死亡13時間前) 「死んじゃう」「もうやめようよ、家に帰ろうよ」 (死亡4時間前) アイスクリームを食べ、必死に呼吸をしながら好きなオニヤンマの話をする。 |
| O : 5歳 男 | 死亡10日前より、車椅子で散歩に行きたいと毎日出かける (死亡2日前まで)。 (死亡8日前) 今まで嫌がっていたのに、自分から身体を拭いてほしいと言うようになる。 |

「治る？」ときいてばかりいる。

普通の生活に戻りたいという欲求を表す。

「家に帰りたい」「病院にいたくない」と言ってばかりいる。

最後まで自力で頑張ろうとする。

(2) 死に対するの準備をする。

区切りをつける。感謝・謝罪をする。

別れを告げる。遺言めいた言葉を残す。

また、好きな物を食べたい、好きなことをしたいという欲求も死を前にした強い願望かもしれない。

(3) 自分が正に死ぬことを告げる。

突然、死に対するイメージめいた言葉を言う。

「バイバイする」「もうだめだ」等言う。

(4) 死を受け入れる。

これははっきりと表している行動はみられないが、特徴的だったのは、素直になる児が多いこと、将来のことを語る行動がみられないことである。

ターミナルケアにおいては、まず患児の言葉に耳を傾け、常に聞く姿勢をもつことが大切であり、患児が何を望んでいるのか、どういう気持ちでいるのかを理解する必要がある。そして、死に対するの準備を意味する行動があれば、積極的にかかわることが大切である。

死を迎えるにあたって、身体をきれいにする、家族と別れを告げる機会を与える、できる範囲で行動制限を緩和する等が、この時期の患児には必要であると思われる。家族も、この時期の清拭、面会・食事等制限の緩和がうれしかったと述べている。また、ケアや薬の使用時、相談的にしてくれたことも印象深かったようである。そして、看護者の言動・態度も患児や家族に深い影響を与えていることを考慮して、ケアにあたらなければならない。

5. おわりに

今回の結果は、家族の立場から得られた情報と、本研究を意図しない日々の看護記録というデータから得られたものという限界を有する。しかし、本研究で得られた結果は、われわれの臨床経験の中で感じとってきた内容について、ある程度ははっきりとしたまとまりある資料となり、死に直面した患児の心理を理解する上での基礎資料となった。

今後、さらに日々の患児の行動に留意するなどしてデータを集め、分析を重ねることにより、さまざまな行動パターンとその意味を明らかにし、ターミナルケアにつなげることが課題である。

引用・参考文献

- 1) E・キューブラー・ロス、川口正吉訳：死ぬ瞬間の子供たち、読売新聞社、1982.
- 2) ロバート・W・バッキングム、松下祥子訳：ぼく、ガンだったの？—死にゆく子どものケア、春秋社、1989.
- 3) パーニー・グレイザー他、木下康仁訳：「死のケア理論」と看護、医学書院、1988.
- 4) 若林一美：デス・スタディー死別の悲しみとともに生きるとき—、日本看護協会出版会、1989.
- 5) 岡田洋子：学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討、天使女子短期大学紀要、No.11, 21~35, 1990.
- 6) 細谷亮太：小児がん患者のターミナルケアとデスエデュケーション、ターミナルケア、1(2), 105~109, 1991.